K-6　東松島市宮戸月浜地区　　2013年1月14日（月）

報告者名　俵木　悟　　被調査者生年　1949年（男）
調査者名　俵木　悟　　被調査者属性　月浜えんずのわり保存会長、民宿経営
補助調査者　大沼　知

月浜のツメバンについて

ツメバン（詰番／詰板）とは、月浜で、家ごとの順番で地区の用務にかかる役の名称、およびそれを表示するために家の玄関にかける板のことである。役割の具体的内容は、区長の仕事を軽減するために、行政からの配布物や区の行事の連絡などについて、区長からの指示に従って働くことである。

ツメバンは、基本的にかつての集落の西側の端から順番に、家ごとに渡すものであった。1件の用事が終わるごとに、板を次の家に回して役割を引き継いだ。用事があるときには、区長がツメバンの下がっている家に来て、配布物を置いていったり、連絡を伝えていった。

ツメバンの板は、今回の津波で流されてしまった。板には表に「月浜地区詰番」と書いてあり、裏には何も書いていなかったと記憶しているという。当たり前に引き継いでいたので、とくに意識してその板を見たこともないという。

大正12年宮城県桃生郡教育委員会編纂の『桃生郡誌』には「本村大濱月濱區に板子（詰番板）一枚ある。それは古ぼけた割目を釘止にした板子である。書いた文字が磨滅して解らないが、簡単な罰則が書いたものらしい。この詰番板は藩政時代に出來たものである」と記されているが、震災前に使用していたものは、それからは何代か新しくなったものと考えられる。

ツメバンを回す順番は、これに限らず月浜の様々な役割を回す順番になっている。伊勢講のトエ（当家）はこの順番にしたがって3軒一組になり、そのうち順番の一番若い家が一番トエになる。女性の講（観音講、山の神講）の当番もこの順番で回していた。ただし山の神講は昔は西と東に分けて行っていた。東西を分ける境界は、五十鈴神社から海岸に向かってまっすぐ延びる道路（参道）であった。順番は、家の出入り等でときどき変更されていたという。今回聞き取った、震災前の時点でのツメバンの順番を、図に示しておく。（図1）

屋号について

月浜では屋号はあまり使っていなかったため、すべての家の屋号はわからない。かみの家、東の家、西の家など、古い家は民宿の名前に屋号を使っているが、必ずしも民宿の名前がすべて屋号とは限らない。たとえば民宿はまなす荘は、昔はインキョ（隠居）という屋号で呼ばれていた。同じく民宿鈴喜荘はメエノイエ（御前の家）と呼ばれていた。これは鈴喜荘の向かいにある民宿あけぼの荘が、かつての庄屋の家だと言われており、その前の家という意味だろう。いずれにせよ、日常生活の中では民宿の名前で呼ぶことがほとんどであった。

神社に近い方にある家が古くからの家で、そこからだんだん海岸の方に集落が広がっていった。昔は海岸に堤防がなかったので、海岸の近くに人は住まなかった。先ほどあげた屋号で呼ばれる家も大半は海岸から離れた場所にある。

月浜の宝桂寺について

『豊かな自然と縄文の里　宮戸』という資料に、月浜の寺として真言宗宝桂寺という寺が記されている。五十鈴神社の隣にある民宿邦月荘も、昔は寺だったと言われているが、宝桂寺とは別であったと考えられている。大友荘

図１　月浜区のツメバンの回り順

写真１　かつての月浜海水浴場の賑わい（話者提供）

の西の脇に太子堂が建っていたが、そこがさらに昔は寺だったのではないかと考えられるが定かではない。五十鈴神社の境内に祀られている、かみの家の氏神の観音様は真言宗といわれ、里浜の医王寺も真言宗であるので、月浜に真言宗の寺があったとしても不思議ではないのではないかと話者はいう。

太子堂について

太子堂は年に１度、女性たちが集まって「お太子さま」の行事を行っていた。かつては民宿大友荘の奥に太子の像を祀った建物と、それに付随した長屋のような建物があった。古くは太子堂の管理をしていた人が住んでいたのではないかと言われていたが、後に宮戸中学校と小学校にそれぞれ赴任してきた教師夫妻がそこを借りて住んでいた。その教師夫妻は月浜を去った後も、世話になったお礼として多額の寄付を太子堂に寄せ、それで月浜の人たちは太子の像を新調したが、それも今回の津波で流されてしまった。

白菜の種取りと、月浜の生業の変化について

仙台白菜の種取りは、昭和 40 年代後半までやっていたという。話者が小学校の時にはよく手伝っていたという。種を取るには、収穫した籾を足で踏むのだが、それが子どもたちには楽しかった。その籾を唐箕にかけて殻を飛ばして種を取った。種取りは渡辺採種場からの委託で行っていた。委託で栽培するのは品種が決まっており、雑種化しないように、花が咲く季節になると路地に咲いている花をすべて刈って、栽培しているものと花粉が混ざらないようにした。宮戸島で菜種を栽培していたのもそのためで、ミツバチなどが外から来て別の種と受粉しないようにという配慮から、離島で行うことが多かったという。主に栽培していた場所は稲ヶ崎の西側の段々畑だった。

戦後しばらくは水田での稲作とこの菜種の栽培が月浜の生業の中心だった。話者が小学生の頃、室浜で海苔の生産がはじまった。月浜では話者の親族が最も早く海苔の生産に従事した。海苔が軌道に乗り出すと、菜種の栽培は徐々に下火になった。とくに月浜の場合、稲ヶ崎の段々畑などでは一輪車やリヤカーが使えず、収穫した作物を背負って運ばなければならないなど、場所が不便であった。さらに観光客が増えてくると、土地を畑にしておくより駐車場にした方が儲かるということになった。

月浜はもともと農業に向いた土地ではなく、安定はしていたが大きく儲けられる生業ではなかった。それに対して海の仕事は調子がよければ大金を稼げた。話者が高校を卒業した年（昭和 42 年）の秋のことであるが、月浜ではウップルイ海苔という早生種を作っていた。当時は浅草海苔という種類が全国的に主流であったが、この年はそれが全国的に不作だった。ウップルイ海苔も作っていた月浜はその価格が上がり大きく稼いだ。唐戸島との間の浅瀬などに、竹の先にコンクリをつけて、それを海に挿して、そこで自然採苗した。朝早く起きてその作業をやって、その後バイクで高校に行ったのをよく覚えているという。この年、一番採った人で 1,000 万円くらい稼いだのではないか。当時、50 坪の家が 500 万円くらいで建てられたので、家を買ってもまだ余るほど稼いだことになる。その出来事を境に海苔生産に進出する人が増え、その稼ぎで誰もが家を新築した。

ちょうどその頃は高度成長期で、月浜にも観光客が来るようになっていた。そこで家を新築する際に民宿も建てる人が増え、観光業の基盤ができた。五十鈴神社の前の千鳥荘が、月浜では民宿をはじめたのが一番早く、話者の家（かみの家）では、昭和 44 年に海苔生産用具の倉庫を建て直した際に、その 2 階に部屋を 3 つ作って民宿を始めた。その後、昭和 49 年に自宅を改装し民宿にした。現在の月浜の生活は、その頃に成り立ったのではないか。観光の最盛期には、野蒜駅から月浜まで車の渋滞ができ、7 時間もかかったという。